トカゲ

今号の八尾プレ

リノアスにオープンした「あにまっち」で、かわいい動物たちとふれあう癒しの時間を！

タカ　ミーアキャット

4月1日にリノアスにオープンした小さな動物園『あにまっち』。入口の扉を開けるとまず、ヨーロッパコノハズクのティノちゃんが迎えてくれました。

こちらは、かわいい小動物たちと触れ合える室内型の動物園。大阪府内で複数の福祉事業所を展開している児林秀一さんが、「地域に密着した屋内動物園を作りたい」と開業されました。「福祉の仕事を通じて、多くの方が癒しを求めていることを実感するとともに、コロナ禍に飼い始めたペットを手放すケースも多くあることを知り、少しでも人々の安らぎと動物愛護につながればと考えました」。

開業に際して挑戦したクラウドファンディングでは、人と動物のしあわせを願うその理念に多くの共感と賛同が集まり、見事に目標を達成。支援された方の多くが八尾市在住の方だったとのことで、まさに地域の方に待ち望まれてのオープンとなりました。

児林秀一さん

児林さんは「地域の方に“あってよかった”と言っていただける場所になれば嬉しい。子どもも大人も、悩みや課題を抱えている方も、ここに来て動物とふれあうことで、少しでも癒しややすらぎを感じてもらえれば」と展望を語られます。

こちらにいる動物たちは、ウサギやフェレット、ミーアキャットなど約14種類。動物によっては抱っこや餌やりをすることもできます。アライグマ科のオリンゴや、別名クマネコとも呼ばれるビントロングなど、珍しい動物たちを間近で見ることができるのも魅力です。動物たちのお世話をするスタッフは、動物学校出身の方を積極的に採用。専門知識を備えたスタッフにより、動物たちが安全に暮らせる環境が整えられています。

（左から）丸山夏華さん、佐藤由香さん、神谷真以さん

4月のオープンから約3ヵ月、「親子連れの方が多く、既にリピーターの方もおられます」と店長の佐藤由香さん。この日も、お母さんと来店した4歳の男の子がワシの背中をなでたりウサギに餌をあげたり、ふれあいを楽しんでおられました。

今回の表紙を飾ってくださった神谷真以さんと丸山夏華さんは、「これだけ触らせてくれるフェレットはなかなかいないので、ふれあいに来てください（神谷さん）」「動物園にもいないような珍しい動物にも会えますよ（丸山さん）」と見どころをアピール。ぜひ『あにまっち』に足を運んで、かわいい動物たちと過ごすしあわせな時間を楽しんでください。

タカとふれあいタイム

ウサギにエサやり体験

小さな動物園『あにまっち』の入場券を10名さまにプレゼント！

カメ

フクロウ

モルモット

フェレット

ナマケモノ

応募フォームに必要事項を記入の上、ご応募ください。

応募先　info@yaomania.jp　応募締切　2023年（令和5年）8月末

※当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

応募フォーム

小さな動物園『あにまっち』リノアス店

〒581-0803 八尾市光町2-60
リノアス八尾駐車場棟1F
TEL 072-940-7803
FAX 072-940-7907

あにまっちHP

●ご利用料金
大人（中学生以上）…1,300円
子ども（小学生）…800円
未就学児…無料

●営業時間
10:00〜19:00
（最終入場時間18:00まで）

●ショータイム
猛禽のフリーフライトショーや、うさぎ・カメのエサあげ体験なども実施！内容はその日のお楽しみです。
（1）11:00〜（2）13:30〜（3）14:30〜（4）15:30〜

※動物たちの体調によっては実施できない場合もあります

新Next Yaomania
新Next Yaomania（シン・ネクスト・ヤオマニア）2023年 夏号（通算Vol.47）　発行日：2023年（令和5年）7月16日　発行部数：8,000部　企画・編集：株式会社シカトキノコ
発行：一般社団法人 八尾市観光協会　〒581-0802 大阪府八尾市北本町2-1 ベントプラザ20号　TEL 072-997-6226　http://www.yaomania.jp

新Next 大阪・八尾の地域観光情報誌

TAKE FREE

Yaomania

【シン・ネクスト・ヤオマニア】2023年 夏号 Vol.47

今号の表紙：小さな動物園『あにまっち』

もくじ

02·03｜八尾市長×八尾商工会議所会頭インタビュー　04｜巻頭特集「TEAM YAOTONBO」　05｜浦川良子さん（筆手紙道協会®）／吉野圭介さん（KSK）
06｜藤田盛一郎さん（藤田金属）／別所由加さん（WINGED WHEEL）　07｜梅村保子さん・原田やよいさん（河内木綿藍染保存会）／萩原浩司さん（茶吉庵）
08｜宮﨑加奈さん・宮﨑真佐さん（ごはんやかれん）／寺地真吾さん（朝日航空）　09｜鈴木昌宏さん（FMちゃお）／西川まゆみさん（ハミール）
10｜児玉梨華さん／木本侑鶴くん　11｜徳 治昭さん（徳治昭童画館）／大久保充代さん（プリズムホール）
12·13｜「ふるさと横丁」誕生　14·15｜ヤオマニアがリニューアル　裏表紙｜今号の八尾プレ「小さな動物園『あにまっち』」

一般社団法人 八尾市観光協会

自治体で唯一、
八尾市の出展が決定！

八尾市長
大松 桂右（だいまつ けいすけ）
×
八尾商工会議所会頭
山口 孝満（やまぐち たかみつ）

本格的に始動する「大阪ヘルスケアパビリオン」に向けた想い

大阪・関西万博開催まであと2年。徐々に具体的な内容が見えてくる中で、八尾市は自治体で唯一、「大阪ヘルスケアパビリオン」への出展が決定しています。他の自治体に先駆けて、既に万博に向けた第一歩を踏み出している八尾市。「大阪ヘルスケアパビリオン」が中小企業やスタートアップの支援を掲げていることから、出展に向けた構想や役割について、大松桂右八尾市長と山口孝満八尾商工会議所会頭にお話をお伺いしました。

MC 藤井 加奈子

八尾高校出身／FMちゃおのパーソナリティーや八尾市内のイベントや式典などの司会をつとめる。美容アドバイザーとしても活動中。

「大阪ヘルスケアパビリオン」の役割とは

藤井：八尾市は大阪府・大阪市による「大阪ヘルスケアパビリオン」の「展示・出展ゾーン」への出展が決定していますが、「大阪ヘルスケアパビリオン」の果たす役割について、まずは大松市長からお話いただけますでしょうか。

大松市長：展示ゾーンへの出展については、八尾市内のすばらしい企業を全世界に発信できる、絶好の機会だと思っています。また、多くの民間企業が出展されるなかで唯一、自治体として八尾市が選ばれたのは、“ものづくりのまち”として誇れるところだと思っています。6月の定例会での市政運営方針でもお話させていただきましたが、万博への機運を高め、このチャンスをしっかり生かしていきたいと考えています。

藤井：出展が決まった瞬間は、どのようなお気持ちでしたか？

大松市長の「ヘルスケア」は、睡眠をとること。3歳のお子さんと過ごす時間も、元気の源になっているそうです。

大松市長：八尾市として万博にどのような形で参画するかを試行錯誤していた時期でしたので、こういった決定をしていただけたことは非常に嬉しく、朗報を耳にした瞬間は飛び上がるほど嬉しかったというのが本音です。

藤井：パビリオンの「展示・出展ゾーン」では中小企業・スタートアップ企業がクローズアップされますが、八尾商工会議所としてはこの機会をどのようにとらえておられますか？

山口会頭：八尾商工会議所は八尾市産業の発展と活性化、それを支えている中小・小規模事業者の支援を目的とした事業に取り組んでおり、支えて頂いている会員数は5月現在で3,506社です。会頭としては、八尾市の企業がPRできる大きなチャンスですので、参加企業の募集など、八尾市さんにしっかり協力していきたいと思っています。

藤井：商工会議所としても、万博には協力していかれるということですね。

山口会頭：そうですね。一例を挙げれば、万博に向けて、大阪府内の商工会議所の規模により寄付金の割り当てがありましたが、他の商工会議所が苦戦するなか、八尾商工会議所は早々に達成率160％近くの寄付金を集めることができました。八尾市の企業の皆さんは八尾に誇りを持ち、八尾を愛する気持ちが強いことを実感します。

藤井：ありがとうございます。では続いて、このたびの出展について、八尾市が提案した中小企業・スタートアップの技術力や魅力を発信する「リボーンチャレンジ」の事業内容と、その内容が自治体で唯一認定された理由について、教えていただけますでしょうか。

大松市長：八尾市ではリボーンチャレンジとして、「まちこうばのエンターテイメント！ ～みせるばやおモデル～」を実施します。八尾市はご存知のように、ものづくり企業が集積しています。本日は山口会頭にも同席いただいておりますが、商工会議所をはじめ、多くの企業や金融機関、地場産業、大学等ともしっかり連携してきました。連携の拠点となる「みせるばやお」というプラットフォームを活用して、これらの取り組みを展開してきたことが評価されたと考えています。

藤井：万博でも、“ものづくりのまち・八尾”をアピールされるわけですね。

大松市長：万博会場での展示はもちろんですが、実際に八尾に来て町工場にも足を運んでいただき、工場の音やにおいを体験していただく、ものづくりの現場をエンターテイメントとして楽しんでいただく、そんな仕組みを作れたらと考えています。いわば、「拡張万博」として八尾市内の町工場が、万博の展示ブースのサテライトになるようなイメージです。八尾には世界で活躍されている企業や海外の賞を受賞されている企業もありますから、そういった魅力を発信できればと考えています。

藤井：山口会頭は、商工会議所としてどのような関わり方をしていきたいと思っておられますか？

山口会頭：八尾市は、歯ブラシで全国トップシェアを誇るなどものづくりの企業が多く、製造業の数が大阪府では4位の位置にあります。優秀な企業がたくさんあるので、八尾市さんと連携して、その実力を世界にアピールできればありがたいと思っています。「大阪ヘルスケアパビリオン」への参加はもちろんですが、各企業さんも「TEAM EXPO」共創チャレンジに登録されるなど独自の取り組みをされていますので、市と連携して、それぞれの魅力や強みが国内外に発信できたらと思います。

藤井：八尾市と商工会議所がしっかり足並みを揃えていくことが大切なんですね。

山口会頭：その点では、八尾市はどこよりも市と商工会議所の距離が近いと思います。お話させていただく機会も多いので、物事もスムーズに進むかと思います。

藤井：それは心強いですね。出展ブースへの参加企業の募集をされていますが、応募状況はいかがでしょうか？

大松市長：締切は7月20日ですが、多くの企業が説明会に参加してくださっていて、既にかなりの反響を実感しています。

万博がもたらす効果や、万博後の未来について

藤井：“ものづくりのまち・八尾”にとって「大阪ヘルスケアパビリオン」出展は大きなチャンスですが、山口会頭は万博においてどのような役割を自認しておられますか？

山口会頭：商工会議所としては、万博で来阪された国内外の方に八尾の魅力をどのようにアピールするか、そこが重要だと考えています。大阪の経済は、インバウンドにより活性化しました。万博期間中の来場者は2,820万人、そのうち350万人がインバウンドと見込まれています。その方々に八尾の良さを知ってもらうこと、それが会議所の役割だと考えています。

藤井：市長は、万博によって、どのような効果が八尾にもたらされるとお考えですか？

大松市長：八尾の魅力はものづくりだけでなく、歴史文化もありますし、八尾空港もあります。万博でその魅力を発信することで、万博後も八尾に来ていただく方が増えれば、市民や企業の皆さんにも相乗効果があるかと思います。

藤井：会頭は事業者目線で、どのようなことを期待されますか？

山口会頭：国内外から人が集まる機会ですので、大きなビジネスチャンスだと考えています。八尾は産業だけでなく地域資源が沢山あります。河内音頭もありますし、枝豆や若ごぼうなどの名産品や歴史文化もあります。外貨を取り込むためにも、八尾の持っている文化や産品をしっかり海外に発信できる機会にしたいと思います。中でも八尾空港をどう活用するかは、非常に興味・関心を持っています。

「好きなものを食べ、好きなときに寝る」という山口会頭。ストレスをためないことが、健康の秘訣かもしれません。

藤井：なるほど、万博で八尾空港はどう変われるか、ですね。

大松市長：僕も八尾空港は八尾の大きな魅力のひとつだと思っています。空飛ぶクルマも注目されていますし、将来実用化されれば八尾空港がその拠点になれるのではと期待しています。

藤井：八尾空港の発展は、八尾にとってひとつの大きなキーになりそうですね。

山口会頭：八尾空港の有効活用は以前から取り組んでいて、実際に活用に関する勉強会も実施しています。大阪や関西は、世界からも注目されている地域であると思います。IRも開業すれば、富裕層のプライベートジェットの受け入れなども可能ではないかと考えています。

藤井：では最後に、万博に向けてオール八尾で盛り上がれるように八尾市民のみなさんにメッセージをお願いいたします。

大松市長：大阪で万博が開かれるというチャンスを生かしながら、万博が終わった後も八尾市を訪れていただける、そんな機会にしたいと考えています。また、これから成長していく子供たちが万博を経験することで、夢や希望を大きく広げてほしいと思います。まだまだもっと盛り上げていかないといけないので、市民の皆様にもご理解・ご協力をお願いいたします。

山口会頭：1970年の万博当時は中3でしたが、すばらしい夢を見せてもらいました。ですから今度の万博も、あのときのような感激と思い出を、今の子供たちにも体感してもらえたらと思います。私自身も今から、とても楽しみにしています。

大阪で55年ぶりに開催される万博を、一緒に盛り上げませんか？

「大阪ヘルスケアパビリオン」内の「展示・出展ゾーン」における事業企画（リボーンチャレンジ）として、八尾市では「まちこうばのエンターテイメント！～みせるばやおモデル～」を実施し、中小企業・スタートアップの万博参加に取り組みます。日々の生活でSDGsを通じて、万博とつながる八尾市民総参加の「80（やお）アクション」運動を推進しています。詳しくは、八尾市HPをご覧ください。

提供：（一社）大阪パビリオン
協力：2025年日本国際博覧会協会

八尾の万博情報サイト
80（やお）アクション

八尾市の大阪ヘルスケア
パビリオン参加情報サイト

2025年
大阪・関西万博に
向けて

共創チャレンジ「TEAM YAOTONBO」始動！

八尾は「人」が主役のまち！
魅力あるまちは、魅力ある人で成り立っています。

八尾市観光協会「TEAM YAOTONBO」は、『TEAM EXPO 2025』プログラムにおける共創チャレンジとしてプロモーションを展開して参ります。「TEAM YAOTONBO」は、八尾を拠点に活動する魅力的な人を知っていただくこと、関わっていただくことを目的にした「人」主体のプロジェクトです。今回は八尾で活動されている14人の方にご登場いただき、それぞれの想いやチャレンジ目標などをお聞きしました。

3 すべての人に健康と福祉を
8 働きがいも経済成長も
11 住み続けられるまちづくりを

◀TEAM YAOTONBOの詳細はこちら

TEAM EXPO 2025 いのち、みらいに。"共創チャレンジ"

『TEAM EXPO2025』共創チャレンジとは

大阪・関西万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」を実現するため、自らが主体となって未来に向けて行動を起こしている、または行動を起こそうとしているチームの活動のこと。

筆手紙道協会® 家元／浦川良子さん
四季を感じながら、伝える人も受け取る人も幸せになる【手書きの文化】の継承・普及に努める。NHKなどメディアにも多数出演し、店舗ディスプレイや看板デザインなど幅広く活躍中。

ひと足速く、世界に八尾の魅力を発信！
誰よりワクワクしながら、2年後の万博へ。

■万博への想いを、筆や和紙で美しく表現。

デジタルの時代だからこそ、手書き文化の魅力を伝えたいと活動している浦川さん。「TEAM EXPO 2025」共創チャレンジにも登録し、さまざまな取り組みを行っています。そのひとつが『万博への想いプロジェクト』。文字や絵など自由なスタイルで、万博への想いを和紙に綴ります。3月に開催されたプリズムホールの展示では、八尾市長はじめ55名が出展。広報のガンブラン岡﨑花那さんのアイデアで、各作品に書いた人の情報が見られる二次元コードも付けました。「交流は万博のテーマでもありますから、字を見て興味を持った方について知ることで、つながりのきっかけになれば」と浦川さん。また、コロナ禍のマスク生活などで余ったコスメを、画材として有効活用する活動も行っています。口紅やアイシャドウは絵具とはまた違う色彩で、表現の幅も広がるとのこと。ほかにも普段は破棄する野菜のヘタやスポンジを活用するなど、SDGsに関する活動にも力を注いでいます。

■八尾の「多様性」は、世界に誇れる魅力。

浦川さんの活動は八尾市内にとどまらず市外、さらには海外へも。『万博への想いプロジェクト』は6月にフランス領グアドループ島で、7月には東大阪市役所でも開催されます。その精力的な活動の根底にあるのは、八尾の魅力を発信したいという想い。海外経験の長いガンブラン岡﨑さんはその魅力を「多様性」と言います。「いろいろな国を見てきた中でも八尾は個性的な方が多いですが、それはお互いの違いを受け入れ、認め合っているからだと思います。八尾は時代に先駆けて、多様性のあるまちだと感じます」。この世界に通じる魅力をアピールする機会が、まさに万博。いよいよ2年後に迫った開幕に向けて、浦川さんに想いをお聞きしました。「今からワクワクしていますし、このプロジェクトでできたご縁はこの先につながっていきます。だからおせっかいですけど、私たちから盛り上がりましょう！と皆さんにお声掛けしています。できることはささやかですが、市民みんなで楽しんでいきたいですね」

TEAM EXPO 2025 共創チャレンジ 筆手紙道協会

今までにない感動体験 in OSAKA！ Deep Experience 【想いをつづる筆手紙】プログラム

「字は一期一会。その時のその人が現れます」と浦川さん。プリズムホールでの展示には、東大阪市、藤井寺市、柏原市、河内長野市、門真市などの市長も参加し、想いをしたためた

広報のガンブラン岡﨑花那さん（右）のご主人はカリブ系フランス人。「彼が八尾の自然や文化を好きになってくれたことで、私もその素晴らしさに気付けました」

KSK代表／吉野圭介さん
2011年にオリジナルTシャツプリントショップ『KSK』を創業。丁寧なヒアリングとデザイン力が支持され、企業から個人まで全国から依頼が舞い込む。

着る人が増えるほど認知度がアップ！
Tシャツで八尾の名産品をアピール。

■地元の名産品をおしゃれなTシャツに。

八尾名産の枝豆や若ごぼうをプリントしたTシャツは、八尾市観光協会のお土産自販機やふるさと納税の返礼品でも人気のアイテム。デザインを手がけた吉野さんは、「僕らは有名だと思っているけれど、世間的な認知度はまだまだこれから」だった名産品をアピールしようと、2017年にオリジナルTシャツを誕生させます。特に人気が高いのは、枝豆をキャラクター風にアレンジしたEDAMAMEちゃんシリーズ。「デザインを気に入って購入されて、後から八尾の名産が枝豆だと知った方もおられます」と言うほど、そのかわいさが人気を博しています。八尾市外のイベント等での売れ行きも好評で、「地方発のローカルTシャツとしては、健闘しているほうかなと思います」と吉野さんも自信を覗かせます。着ている人が増えるほど八尾のPRになるのが、Tシャツのいいところ。KSKのTシャツは今や、八尾の名産品の宣伝隊長的存在ともいえそうです。

■他にないぐらい、“地元愛”が強いまち。

名産品をデザインしたTシャツで八尾をアピールする吉野さんは、2025年の大阪・関西万博に向けて「大きなことはできないけど、八尾の方が魅力発信できるツールとして、Tシャツがお役に立てたら」と語ります。海外の観光客に向けた蛍光カラーや和柄デザインなど、新アイテムも計画中とのこと。万博については「1970年の万博を父親がとても懐かしがっていて、それほど記憶に残るイベントだったんだなと感じます。そのイベントが再び大阪に来て、そこに関われるのはすごく楽しみです」と期待を寄せます。最後に、八尾が世界にアピールできる魅力についてお聞きしました。「八尾の方は皆さん、他の自治体にはないぐらい強い“地元愛”を持っておられます。『大阪ヘルスケアパビリオン』の出展にしても、個々の力が集まって、八尾市民全員が貢献しているような、そんなイメージが創出できたらすごいんじゃないかなと思います」

オリジナルグッズ 企画・製造・販売 KSK公式サイト

KSK ショップサイト「デザインTラボ」

EDAMAMEちゃんの新作や、八尾空港をイメージした飛行機デザインのTシャツのほか、キャップやポートなどグッズも展開

地元を愛する有志で作成した八尾枝豆や若ごぼうをアピールするTシャツは、大松桂右八尾市長にもお披露目

interview ものづくりに力を注ぐ人

フライパンメーカーとしての理想を追い アイデアと行動力で世界をめざす。

藤田金属株式会社／藤田盛一郎さん
創業1951年の藤田金属の4代目代表取締役社長として、デザインを取り入れ、オリジナリティ溢れる商品を世に送り出す。2021年には工場を直営店併設のオープンファクトリーへ改装。

■培われた技術×デザインで新境地へ。

大学卒業とともに藤田金属へ入社し、価格至上主義の市場から脱し、新たな商品開発にチャレンジを続けてきた藤田盛一郎さん。そして2015年に完成させたのが、材質や色などを自分の好みに組合わせた、カスタマイズ式フライパン「フライパン物語」です。「“暮らしを豊かにする金属”をスローガンに、重い金属のイメージを軽く優しいものに変えたい。便利になることで、お客様の笑顔が生まれたらいい。そういう想いで取り組んでいます」。そこには重さを軽減するヘラ絞り加工や、事前に熱処理を施して空焼きを不要にするハードテンパー加工といった独自技術が活かされています。また自社で金型をつくれるため、開発スピードも早いという強みがあります。さらに2019年には、ハンドル部分が着脱式になった「フライパンジュウ」をデザインユニットTENTと共同開発。デザイン性にも優れ、調理後そのままお皿として活用できる画期的な商品として注目を浴びました。

■海外に出てわかった、自社の独自性。

『フライパンジュウ』が大ヒットしたことで、以前は想像しなかった世界が広がります。「ドイツやフランスの国際展示会に出展しましたが、うちのような構造を持つ鉄フライパンを作るメーカーはなかった。ここで手応えを感じました」。国際的な舞台で名前を広めることでブランディングが図れ、今では海外からの受注も増えています。その後も世界3大デザイン賞のうち2冠を達成し、大手企業とのコラボを続々と発表するなど順風満帆。現在、藤田金属ではショップ併設のオープンファクトリーや、工場内映像のYouTube配信など多彩なコミュニケーションも行い、近頃は海外から訪れる人も増えたとか。「万博では大阪ヘルスケアパビリオンのリボーンチャレンジ出展予定です。海外に向けてさらに発信を強化したいですね」。八尾の魅力を「多種多様なものづくり企業が集積した町であること」と捉える藤田さん。「だから団結して、それぞれの技術を合わせたコラボ商品を世界に発信できたら、この町を知ってもらえるきっかけになるはずです」

藤田金属株式会社 Webサイト

フライパンジュウ 公式サイト

木製バット不適格材を鉄フライパンのハンドルに使用したMIZUNOとのコラボ。サステイナブルなだけでなく手触りも抜群

藤田金属の看板キャラクター「フランちゃん」。登場から9年が経ち、降板検討中に突如SNSで話題となり今や大人気に

日本製オイルランプの火は消さない。 時代の嵐に負けずに迎える創業100周年。

株式会社 WINGED WHEEL／別所由加さん
1924年（大正13年）から続くランプ製造工場を受け継ぎ、24歳で社長に就任。日本で最後のランプ職人として毎日放送「情熱大陸」にも取り上げられるなど、メディアからの注目度も高い。

■ハリケーンランプを製造できる「最後の1人」。

「嵐の夜にも消えない」とキャンパーからの厚い信頼を集めるハリケーンランプ。アウトドアブームで注目が集まり、別所さんの作るランプは予約から約5年待ちという人気です。かつてランプは暮らしの必需品でしたが、電気の普及で需要が激減。別所さんの曾祖父が立ち上げた会社も廃業を余儀なくされます。小学6年生だった当時は「特に何も感じなかった」という別所さんですが、24歳で跡を継いで想いが一変。「ランプづくりの仕事がどういうものか分かってきたときに、ふつふつと怒りがわいてきて。なにが失われようとしていたのに気付いたというか、言葉にするのは難しいですが、その怒りが原動力になっている気がします」。自分がやめれば日本製のランプがなくなる、そのことが悔しくて、許せなかったと別所さん。「ここで踏ん張らなあかん人間がいるとすれば、それが私やなって。負けず嫌いなんですね、めちゃくちゃ。」

■受け継ぎながら、時代に合わせてアップデート。

日本で最後のランプ職人になったとは言え、重圧感はあまりないと言います。「誰かに言われて継いだのではなく自分で選んだ道ですし、コツコツ同じことをやるのも苦にならない。向いてたんでしょうね、ものづくりという仕事が」。別所さんが跡を継いだ当時、会社にはランプ製造に必要なデータも金型も揃っておらず、試行錯誤しながら再現に努めてきました。「まわりの八尾の企業さんにはずいぶん助けてもらいました」と別所さん。10年かけて集めたデータは細かくノートに記し、次代へ受け継ぐ準備を整えています。伝統の継承と並行して別所さんが注力しているのが、時代に合ったものづくり。「使ってもらうことが未来につながっていくので。ハリケーンランプも実は、今の暮らしに合わせて少しずつ改良しています」。2年後の万博については、「大阪の前の万博のとき、母がフライドチキンを始めて食べて、肉を手で持ってかじるなんて…！ってカルチャーショックを受けたらしいんです。次の万博で、私もそんな体験ができたら面白いですね。時代が変わればうちの仕事も変わるので、その流れも見極めたいと思っています」

日本製オイルランプ FLAME SENSE Webサイト

「オイルランプのある生活」をインスタグラムでも提案

「ただ作るのではなく、そこに想いがないとものづくりとは呼べない」と別所さん。八尾にはその“想い”をもった企業が多いと言う

来年の創業100周年に向けて、特別モデルを製作中。ラメがきらめく95周年モデルを超える、スペシャルバージョンになる予定

interview 伝統文化を未来へつなぐ人

ついに完成した、正真正銘の「河内木綿」。 郷土の魅力を、着物や洋服で楽しんでほしい。

河内木綿藍染保存会／梅村保子さん、原田やよいさん
中河内の古民家に残っていた布からの文様の復元と伝承を行うNPO法人。後継者の育成や綿花の栽培、毎夏行われる「與兵衛桃林堂うちわ展」など、さまざまな活動で河内木綿の魅力を次代につないでいる。

■八尾産の綿花で織った反物に、伝統文様を染色。

「河内木綿藍染保存会」に嬉しいニュースが舞い込んだのは、昨年のこと。これまで約10年にわたり、「夢のコットンロード」と名付けた八尾市内の畑などで栽培・収穫した約50kgの綿が、布に織り上げられることになりました。綿の繊維が短いため機械での大量生産に向かず、衰退したという歴史がある河内木綿。それをオーガニックコットンと混紡することで、機械で織ることが可能になりました。「私たちは河内木綿文様の型で染めを行っていますが、生地は普通の木綿布でした。生地も河内産木綿だと思われる方が多くて。だから今回、本物の河内木綿の布ができるのは、大きな喜びです」と理事長の梅村さん。綿花を紡いだ約229kgの糸から、最初96反の反物が織り上げられました。そのうち56反を、河内木綿文様古典17柄の中から、牡丹二重唐草と菱藤の2型を捺染という技法で染色。今後はふるさと納税の返礼品など、河内木綿の魅力発信につながる活用法が検討されています。「この土地で育てた綿を糸にして、反物ができたことが一番の成果。郷土の魅力を着物や洋服にしてお召しいただけたら、こんな嬉しいことはないですね」。

■万博を、歴史深い八尾の魅力を伝えるきっかけに。

本物の河内木綿の原料となった綿花を栽培するコットンロードは現在、地元の団体が運営に関わり、大阪府立農芸高校の有志の生徒たちも綿花の栽培に参加しています。高校生の参加について副理事長の原田さんは「みなさん自主的に通って来てくださるのが嬉しくて」と笑顔で語り、河内木綿を守る活動が地域に根差し、若者に受け継がれ、未来につながっていくことを期待されています。関西・大阪万博に向けては「企業や団体さんと協力して、少しでもアピールできる機会になれば」と梅村さん。大阪観光局が発行するインバウンド向け冊子に掲載されているほか、保存会のホームページを見て海外の方が体験に来られたこともあったそうです。最後に、万博を機にアピールしたい八尾の魅力についてお聞きしました。「八尾はとても歴史の古い街なので、それを知ってもらいたいですね。大阪と言えば梅田や道頓堀、ヒョウ柄みたいな印象がありますが、国内外の方に八尾の文化を含めた歴史をアピールできる機会になればと思います（梅村さん）」

NPO法人 河内木綿藍染保存会 Webサイト

牡丹二重唐草を染めた反物で仕立てた着物。「100年以上も前の文様ですが、今見ても斬新です」と原田さん

上が牡丹二重唐草、下が菱藤。河内木綿文様は地域によって個性があり、八尾近辺（中河内）はおおらかさが特徴

地域の結び目として 文化の発信地になっていきたい。

茶吉庵／萩原浩司さん
築約280年の元河内木綿問屋兼肝煎の屋敷で、国の登録有形文化財である『茶吉庵』の19代目当主。芸術作品を楽しめるギャラリーにイベントスペース、カフェなどを運営する。

■芸術の敷居を下げ、「ほんまもん」を身近に。

河内木綿は徳川家康より「天下一品」とのお墨付きをもらい、さらに大和川の付け替えによって一大産業へと成長。その河内木綿を扱う萩原家が問屋・織元として建てた屋敷が『茶吉庵』です。280年の歴史を持つこの場所を再生して5年目。後世まで残す意味を模索するうち、たどり着いたのが「ほんまもんにこだわること」。「建物を残すことには2つの意味があって、ひとつは歴史を残すこと。もうひとつは古民家を活用しながら未来を創っていくことです」。『茶吉庵』では落語会やクラシックの演奏会など多様なイベントを開催していますが、これも敷居を下げて「ほんまもん」を身近に接してもらうため。同時にアーティストの応援をするべく、ギャラリーでは展覧会を毎月開催。「江戸時代、芸術を支えたのは商家。萩原家でも無名時代の上村松園などの活動を支援してきました。アーティストを応援するのは、この場所が果たした役割の再興という意味があります」

■アートを結ぶ、アートを紡ぐ場所に。

「ラテン的と言われる大阪のなかでも、河内音頭に代表されるように八尾は熱い土地柄。芸術文化にもパワーがあります」。やおうえるかむコモンズ推進会議で副会長を務める萩原さんは、「制作する側と見る側がつながる場所でありたい。アートを結ぶ、アートを紡ぐをテーマに芸術を身近に感じてもらいたい」と語ります。そうした活動を積み重ねて「芸術文化といえば、八尾」となれば、「さらに芸術に産業や福祉を組み込みたい。それが八尾らしい芸術文化でしょ」。八尾空港でフェスをしたり、アウトサイダーアートやeSPORTSなども柔軟に取り込んでいけば、裾野はどんどん広がる。それに触発された人が新しいことをはじめるかもしれない、とアイデアが尽きることはありません。「令和10年をやおうえるかむコモンズ推進会議での集大成と考えていて、神社仏閣や工場を巻き込んだイベントを開催したい。関西万博では海外から来られた人に、ここでリアルな日本文化を体験してもらうなど、そのミニ版として挑戦したいと考えています」

茶吉庵 Webサイト

茶吉庵ギャラリー Facebookページ

『ジャパンアルティスト展』には多様なジャンルの作品が全国から集まり、鑑賞者は好きな作品に投票する楽しみも

エントランスの暖簾は山根木木綿(河内木綿)に、かつて問屋・織元のあった頃の茶屋吉兵衛の通称「茶吉」の名が描かれる

外から来たお客さんを、常連さんがおもてなし。その人情深さが、八尾の人のいいところ。

ごはんや かれん／宮﨑加奈さん、宮﨑真佐さん
姉妹で営む、手作りの家庭料理とお酒が手頃な価格で楽しめるお店。日替わりのおばんざいのほか、牛すじカレーやチヂミ、冬は関東煮も人気。自らイベントも企画し、商店街を盛り上げている。

■「なくなったら困る」と言われる地元の食卓。

四人姉妹の次女・真佐さんと四女・加奈さんが切り盛りする『ごはんや かれん』。2015年に、ファミリーロードにオープンされました。もともとは長女さんも含めた3人で始めたそうで、「染色家だった母が料理好きだったので、その血を受け継いでいるのかもしれません」と真佐さん。お弟子さんやお客さんに料理をふるまっていたお母さまのお手伝いを、子供の頃からされていたそうです。そんなお2人が作るのは、旬の素材を使った家庭料理。ワンコインでお酒と小鉢3つが楽しめるほろ酔いセットも好評で、毎日多くのお客さんで賑わいます。地元の食卓として親しまれており、毎日ここで夕食をとる方も。そのためコロナのときも、売上が立たなくても常連さんのために開けていたと言います。お客さん同士がここで仲良くなることも多く、交流の場や居場所としての役割も。「ここがなくなったら困るわ」と言う方もあるほど、地元になくてはならない存在になっています。

■懐の深いウエルカムな気質が、八尾らしさ。

お2人は「生まれも育ちも八尾本町」という生粋の八尾っ子。かつての商店街の活気を少しでも取り戻したいと、イベントも企画されています。昨年夏に開催した「ちびっこ祭り」は、商店街が人であふれ返るほど大盛況。親子連れを中心に多くの人が訪れました。「それを見た年配の方が、商店街にこんなに人が集まって嬉しいって涙ぐんでおられて。大変でしたけど、やって良かったと思いました」。自分たちのお店だけでなく、商店街活性化の活動もされているお2人から見て、万博で世界にアピールできる八尾の“いいところ”を伺いました。「八尾はやっぱり人情ですね。誰にでも、知らない人にも親切。（加奈さん）」「関東から出張で来た方が来店されたりすると、常連さんたちがもてなそうとしはるんです。せっかく八尾に来てるんやから、楽しんでもらおう！って。そういうウエルカムな気質こそ、八尾の魅力だと思います（真佐さん）」。

看板犬のクウちゃんに会いに、子供たちが立ち寄ることも。「仲良くなった子たちが卒業式に挨拶に来てくれたり、中学校の制服を見せに来てくれたり。そういうのも嬉しいですね」

親子連れを中心に、多くの人で賑わった昨年夏の「ちびっこ祭り」の様子。冬に開催した「ちびっこマーケット」では消しゴムすくいやくじ引きのほか、キッズコスプレ撮影会も行われた

お料理は旬の素材を使用。八尾名産の枝豆や若ごぼうももちろん登場します。加奈さんの特製チヂミも人気で、「知らないうちに、大阪のチヂミランキングで8位になってました（笑）」

※喫煙可能店のため、20歳未満の方は入店できません

八尾空港は、他の自治体にはない貴重な資源。万博を契機に、もっと「空のまち・八尾」へ。

朝日航空株式会社 営業部／寺地真吾さん
東京から赴任し、八尾歴は1年半。「大阪勤務は初めてですが、八尾はすごく静かで街並みも落ち着いた印象。スーパーなどの商業施設も充実していて、住みやすいまちだと思います」

■航空会社として注目している〈空飛ぶクルマ〉。

八尾空港を拠点に、プロパイロット養成やチャーター飛行、航空機の点検・整備など、さまざまな事業を行っている朝日航空株式会社。なかでもプロパイロットの養成では、エアライン機長経験のあるOBが教官を務め、自社開発のフライトシミュレーターを使用するなど、独自のプログラムでエアライン各社への高い就職実績を誇っています。また、八尾の魅力を五感で楽しむプログラム『八尾物語』では、万博会場の夢洲や、世界遺産・仁徳天皇陵を上空から眺める遊覧飛行ツアーも実施していただきました。そんな朝日航空が注目しているのが、万博で本格的なお披露目が期待される〈空飛ぶクルマ〉。会場である舞洲にVポートを設置し、遊覧飛行や二地点間の移動などが予定されています。「そこに、我々の技術やノウハウが生かせないかと、親会社である朝日航洋とともに検討しているところです」と寺地さん。空飛ぶクルマ用シミュレーターの開発など、自社の強みを生かした展開を計画しています。

■エアモビリティの中心地になり得る八尾空港。

万博では八尾空港の果たす役割についても関心が高まっていますが、寺地さんは「八尾空港は、八尾が誇るべき重要な資源。万博を契機に、大きく飛躍する可能性があります」と期待を寄せます。「伊丹や神戸空港のような定期便が八尾空港には就航していませんが、実はそこがポイント。定期便の制約を受けずに、小型機やヘリコプターが自由に離発着することができます。ですから、万博を機にエアモビリティの活用が広がれば、八尾空港がその中心地になれるのではないかと私たちは考えています」。定期便が就航しておらず、滑走路が2本あり、都心部からも近いという条件がそろった空港は全国でも珍しく、「八尾ほど、“空のまち”というキーワードがぴったりくる自治体は他にないのでは」と寺地さん。それだけに、大阪府民でも八尾に空港があることを知らない現状を「もっとPRが必要」と言い、万博が多くの方に八尾空港の存在を知ってもらう機会になることも期待しています。世界が注目し、「空の移動革命」ともいわれるエアモビリティの実用化は、もう目前。八尾空港から空飛ぶクルマで観光や旅行に出かける、そんな未来もそう遠くはないのかもしれません。

朝日航空株式会社
Webサイト

コロナ禍で休止していた遊覧飛行も再開に向けて準備中。万博の際には、インバウンド需要も見込まれる

大阪・関西万博の目玉である<空飛ぶクルマ>。朝日航空でも、ヘリや小型機で培った技術を生かした展開を検討

コミュニティFMは、人に寄り添うメディア。万博に向けて掲げるのは、当事者の声を届ける放送局。

FMちゃお／鈴木昌宏さん
フリーのラジオディレクターとして和歌山や兵庫などのコミュニティFM局を経験した後、2002年にFMちゃおへ。現在は「ラジオの仕事を俯瞰で捉え、これからのFMちゃおを背負う」人材育成に尽力。

■心のバリアを上手にすっと破る、八尾の人。

コミュニティFMとして、地域に密着した情報を発信しているFMちゃお。2023年4月には開局25周年を迎え、開局記念日の4月29日にアリオ八尾でイベントも開催されました。25年の長きにわたり、年間2000件もの取材を行ってきたFMちゃお。鈴木さんはこれまでを振り返り、八尾の人の魅力について「人との距離感が絶妙。心のバリアを上手にすっと破る人が多いんですよ」と言います。「歴史的には戦乱の舞台になっていたり、大和川の付け替えがあったり、昭和初期には競馬場が作られたり、戦後は米軍によって八尾飛行場が接収されたり、この小さな街にいろいろな歴史が凝縮されているんです。恩智や高安など地域によっても、受け継いでいる文化が全然違う。さまざまなものが混在する中で生きてきた人だから、八尾の人は皆さん人との距離の取り方が上手なんだと思います」。

■ハンディキャップのある人こそ、発信する側に。

鈴木さんはコミュニティFMを「人に寄り添うメディア」だと言います。「以前さまざまなハンデをもった市民の方が、生涯を終える最後の時までFMちゃおをつけっぱなしだったという話を聞いたことがあるんです。聴きなれた声、街中の取材でよく見る顔、そういう身近なパーソナリティが情報を届ける“体温を感じられる”メディアこそ、地域に必要だと再認識しました」。万博の共創パートナーのテーマには「バリアフリーなラジオ局」を掲げ、「ハンデを持つ方こそ、発信側になるべき」と言います。「例えば、目の見えない方が番組のゲストとしてインタビューを受けることがありますが、そうではなくご自身が番組を持ち、メインパーソナリティとして自分の言葉で語り、問いかける。それが気付きや共感につながります」。物理的なバリアだけでなく心の障壁を超えるために、当事者の声を届ける放送局になりたいと鈴木さん。「体に障がいを持つ人、いじめや不登校に悩んでいる人、病気やケガで寝たきりの人、言葉の壁に悩む外国籍の人、LGBTQ問題など、さまざまな境遇でバリアを感じている人が自らの言葉で情報発信すれば何かが変わります。小さな変化かも知れませんが、それがいつしか現実世界の変化にもつながっていくと信じています」

FMちゃお
（やおコミュニティ放送株式会社）
Webサイト

開局25周年イベントでは、令和3年9月まで放送されていた『ハミダシラジオ』の公開生放送などが行われた

アリオ八尾2階にあるスタジオ。FMちゃおは1998年、全国で95番目のコミュニティFMとして開局

みんながひとつになる合唱を通じて「いつでも帰ってこれる場所」に。

ハミール／西川まゆみさん
『八尾児童合唱団』の卒団生で結成される『ハミール』を総括しながら、『八尾児童合唱団』全体の運営にも関わる。『ハミール』では演奏会を開催し、さまざまなイベントにも参加。

■同じ歌を歌い継いできた「仲間意識」。

八尾には大人向けの合唱団も多くありますが、『ハミール』は『八尾児童合唱団』の卒団生で結成されたユニークな存在です。「私は定期演奏会を見て入団しましたが、親からすると歌よりも、行儀や団体生活を学ばせようと考えたようです」と西川さん。『ハミール』設立は8年前、自治体から児童合唱団への出演依頼からはじまります。「イベントが平日の夜で子供たちの参加が難しくて。卒団生に声をかけたら20人ほどが集まったので、そのメンバーでステージに立ったんです。その時にこんな機会がもっとあればいいねという話になって」。児童合唱団の設立から40年近く、卒団生も増えておりタイミングもよかったといいます。西川さん曰く、『ハミール』は「いつでも帰ってこれる場所」。就職や結婚で八尾を離れても、「またあの時みたいに歌いたい」と京都から1時間かけて通ってくる人もいるほど。そこには「同じ歌を歌い継いできた仲間」という強い絆がありました。

■言葉の壁を超える、歌の力を実感。

児童合唱団も『ハミール』も、卒団生がボランテイアで運営している団体。だからこそ歌うことの楽しさを大切にしてきました。「ここに来たら学校や家でどんなことがあっても忘れて、楽しく歌おう。それは共通しています」。今後は世界の合唱団との国際交流を増やしていきたいと西川さんは語ります。「以前、ポーランドとスイスのイベントに参加し、現地で河内音頭を合唱曲にアレンジして歌い、踊ってもらったんです」。その時、言葉の壁を超える音楽の力を実感したとか。「また万博に関しては親世代から1970年の万博での楽しかった体験を聞いており、子供の頃、三波春夫さんがプリズムホールに来られて『世界の国からこんにちは』の合唱に参加したのでご縁も感じます」。何か関わりたいと考え、「TEAM EXPO 2025」プロジェクトに登録したそうです。「70年の万博は“見る”ことが主体でしたが、今度は会って触って“体験”する万博になる気がします。八尾は元気な中小企業さんが多く、それを発信していくなか歌で関われたら嬉しいですね」

ハミール
Facebookページ

八尾児童合唱団
Webサイト

今年4月に八尾市文化会館大ホールで開催された、八尾児童合唱団45周年記念定期演奏会 ハミール・卒団生合同ステージ

『八尾児童合唱団』や『ハミール』には世代を超え、寄り添い肩触れ合って心ひとつにして歌う喜びがある

オリンピック出場という夢に向かって、家族や仲間がいるから頑張れる。

児玉 梨華さん

年長から空手を、小2からテコンドーを始める。小5よりテコンドーに専念し、第15回全日本ジュニアテコンドー選手権大会優勝をはじめ、数々の大会で優勝。〈がんばる「八尾っ子」〉〈文化の日表彰式典〉で表彰を受ける。

■切磋琢磨できる仲間の存在が、強さの源。

「将来の夢は、テコンドーでオリンピックに出場すること」と目標を掲げる児玉梨華さん。これまで数多くの大会で優秀な成績をおさめてきましたが、その成果は「まわりの人の支えがあったからこそ」と感謝を口にします。「自分1人で強くなれるわけではなく、一緒に練習してくれる仲間がいるから頑張れます」。試合で戦っているときも、仲間からの声援が大きな力になると言います。ふだんは物静かな雰囲気の梨華さんですが、友達の試合の際は必ず声援を送り、「すごい大きい声で応援してくれてありがとうって言われます」と意外な一面も。ともに切磋琢磨できる仲間の存在が、強さの源になっています。また、ご家族については「日常のサポートはもちろん、お誕生日やイベントなど行事を大切にしてくれていて、私の成長や幸せを願ってくれているのを感じます」と梨華さん。常光寺の稚児行列や十三参りには、お祖母さまが大切に保管していたお母さまの着物で臨まれました。

■次は絶対に勝つ！負けず嫌いがモチベーション。

今年1月にはテコンドーの本場、韓国遠征を経験。「韓国の選手は蹴り技が多彩で強くてビックリしました。まだまだ努力が足りないと感じました」と振り返ります。韓国の方ともスマホなどを使ってお喋りできたのが楽しかったと言い、2025年の大阪・関西万博までには韓国語と英語を少しでも話せるように、オンラインレッスンや本を読んで勉強中とのこと。万博では「いろいろな国の人と話せたら」と夢を膨らませています。現在は週5日の練習に励む梨華さん。その原動力となっているのは「負けず嫌いなところ」だと言います。「勝てばもちろん嬉しいですし、負けたときはリベンジしたいと思います。熱心に指導してくださる先生方にも応えたいですし、次は絶対に勝てるように、なぜ負けたのかをしっかり考えます」。厳しい練習の先にある優勝の喜びが、何よりのモチベーションになっています。「テコンドーをやっていなかったら、こんなふうに取材を受けることもなかったので、頑張ってよかったと思います」という梨華さん。オリンピック出場という夢に向けて、仲間やご家族と共に歩む日々が続きます。

梨華さんが練習しているライツテコンドークラブのWebサイト

試合さながらの練習を行う梨華さん。多彩な蹴り技が特徴のテコンドーは、電子防具に攻撃が当たったポイント数で勝敗が決まる。

常光寺の稚児行列は5・6・7歳で参加。お母さまの着物に袖を通したときは「家族の想いを受け継いだようで嬉しかったです」

歌うことでつながる、成長する合唱でかけがえのない体験を。

木本 侑鶴くん

八尾児童合唱団に研究生として所属。3歳から入って今年で4年目を迎える。最近のイベントで唄った童謡「さっちゃん」がお気に入りで、将来の夢は「電車の運転手になりたい」とか。

■ステージで輝く姉の姿を見て入団。

今年45周年を迎えた『八尾児童合唱団』。幼稚園児から大学生まで八尾市、大阪市、東大阪市、奈良県より約50名が在団、卒団生も200名を超えました。最近では卒団生が子供を入団させた「2世団員」も増えています。木本侑鶴くんもそのひとり。お母さまの亜季さん自身も「ステージで歌う姉に憧れて合唱団に入りました」と振り返ります。同じように侑鶴くんも先に入団した3歳上のお姉ちゃんの姿を見て、自然な流れで自分から「やりたい」と言い出したとか。合唱団では練習の過程では上手くいかないことがあっても、最後は心ひとつにして胸に響く素晴らしい歌声を披露します。それはかけがえない経験となり、わが子にも味あわせたいと思うのかもしれません。「歌うことも踊ることも大好き」という侑鶴くん。「親子で児童合唱団に入っていると、私が口ずさんでいると娘がハモり、それを息子が真似したり」（亜季さん）。家庭ではそんな光景が広がっているそうです。

■ファミリーのような団結力が合唱団の魅力。

子供のうちは他学年と触れ合う機会が少ないものですが、2歳から18歳までが所属する合唱団ではさまざまな世代と出会い、指導も高校生の団員が担当します。そこには歌唱法だけでなく、挨拶や礼儀といったしつけも含まれています。そんな経験から上級生には責任感が芽生え、いつしかファミリーのような団結も生まれる、これも八尾児童合唱団の特徴。「正団員になれば合宿や、他県から招いた全国の合唱団との交流もあり、その際にはお互いの家にホームステイもするんです」（亜季さん）。そこで友だちとなり、大人になっても交流の続く人もいるそうです。新型コロナウイルスの影響により、大きな声で歌う合唱は、活動の制約をうけてきましたが、ようやく平常の状態に近づいてきました。侑鶴くんもレッスンや家で歌うことが楽しくて仕方がない様子。2年後には大阪で万博も開催されます。亜季さんも「万博は子供たちの未来につながるもの。この体験が自分たちの町に興味を持つきっかけになれば嬉しいですね」と期待を膨らませています。

八尾児童合唱団 Webサイト

八尾児童合唱団 Instagram

侑鶴くんと亜季さんは親子2代で『八尾児童合唱団』に在籍。亜季さんは現在、卒団生で結成される『ハミール』で歌っている

侑鶴くんは3回の定期演奏会を経験し、今年4月に開催された八尾児童合唱団45周年記念定期演奏会にも参加

ものづくりに賭ける情熱と人の温もり それが八尾の文化を発展させる。

徳治昭 童画館／徳 治昭さん

1993年に童画制作活動スタート。童画家として、独特のテクスチャーで重厚でかわいらしい童画を発表。全国で展覧会を開催し、絵本や画集・グッズ等も展開。2022年には八尾市文化賞を受賞。

■描いて楽しく、見た人もワクワクする絵を。

『らいおんサン』をはじめ、一度見たら忘れない温かく元気をもらえる画風。プリズムホールのベビールームの壁画に、図書館ではお話の部屋の「巨大カーテン」や読書通帳表紙、商工会議所キャラクター『やおっち』デザインなど、八尾に住んでいたら、どこかで徳治昭さんのイラストを目にしているかもしれません。「子供の頃から絵を描いたりものを作るのが好きで没頭していきました。大学卒業後も精力的に展覧会などに参加するうちに活動が目に止まり、八尾市のお仕事が増えていった感じです」。八尾で育ち、地元愛が強いので八尾に関することはこれからもいろいろ手がけていきたいと言います。河内音頭の歌い手をモチーフにした『やおっち』は、幼い頃から河内音頭が染みついており、描いていて楽しかったとか。「振り返るとすごく恵まれたなと。こちらに店を構えさせていただいたり、八尾の皆さんのご好意でここまでこれた。それだけに頑張らないとね」。

■ものづくりとアートの力が未来を創る。

八尾の特色を徳さんは「町工場の情熱のパワー」だと感じています。大学卒業後、いったんこの町を離れてから見えてきたのは、ほかの地域にはない親しみやすさや人の温もり。そして町工場の力強さ。小さな工場が凄い技術を持って、ものづくりに取り組んでいる姿に感激しました。そこに個展で全国をまわり、長年アートイベントも続けて生まれた作家のネットワークを絡めていけば、面白いものができるとも。「芸術家と職人というのは似ているようで違うところもありますが、それがクロスオーバーしていけば、すごく面白いものが生まれるし、八尾の文化発展につながると思います」。万博に向けても、何かお手伝いできることがあればいいかなという徳さん。最近は工場見学に行くことが増え、そこで感じたことがあります。「ものづくりの風景は、外国の方が見ても面白いんじゃないかなと。工場がオープンになって、そこに芸術が絡んでいけば、よそにはない宝物が生まれたり、お互いの技術をさらに発展させるきっかけにもなる可能性はあります」

徳治昭童画館 Webサイト

徳 治昭 Instagram

読んだ本の書名などを預金通帳のようなスタイル記録できる、八尾市立八尾図書館の「読書通帳」の表紙も手がけた

近鉄八尾駅のすぐ近くに6月オープンした『徳 治昭 童画館』。徳さんはこちらで絵を描いていることも多いとか

八尾市全体を芸術文化のステージにして、ウェル・ビーイングにつながる社会に。

八尾市文化会館（プリズムホール）館長／大久保充代さん

公益財団法人八尾市文化振興事業団 業務執行理事。開館翌年の1989年に入団し、以来30年以上にわたり公演の企画制作など文化振興に携わる。各地の文化施設での研修講師など、外部での活動も多数。

■誰もが参加できる「芸術文化の共有地」を作る。

「あなたの人生がかがやく場所」を理念に、音楽や演劇などの公演はもちろん、市民の表現活動もサポートしているプリズムホール。令和4年に八尾市芸術文化基本条例が制定されたことで、これまで以上に大きな役割が期待されます。条例の策定に関わった大久保館長は、「市民の皆さんの多種多様な活動を点から線、面へとつなげることが求められており、市内のどこでも芸術文化に触れられるまちを目指します」と語ります。実現にあたって形成されるのが『やおうえるかむコモンズ』というネットワーク。コモンズとは誰でも出入りできる共有地のことで、市内で活動する個人や団体などがゆるやかに関われる環境を指します。この環境整備に、アートマネジメントの専門家として関わるのもプリズムホールの役割。「誰もが自由に参加できる場だからこそ、コーディネート力が必要になります。参加者の皆さんが自己表現しやすいようにお手伝いするのも仕事です」。大久保館長はまち全体が表現のステージになることで、「誰もが幸せに輝くこと」を期待すると言います。「感動や喜びを感じると、人はイキイキします。芸術文化に触れる機会を増やすことが、市民の皆さんのウェル・ビーイング（幸福）につながればと思います」

■35年で培った「地域に根差すプリズムらしさ」。

万博に向けては、2025年8月にプリズムホールの「財産演目」の再演も予定しています。それが、30年前に制作された「創作オペラかわち歌しばい『美男におわす八尾地蔵』」。常光寺に伝わる、閻魔大王が惚れるほど美しいお地蔵さまを扱ったオペラ作品です。「地元のお地蔵さまを題材に、しかも河内弁でうたうオペラが画期的だった上、楽曲も本当に素晴らしくて。開館当初はバブルだったこともあって海外の著名な楽団やバレエ団を招聘していましたが、徐々に“地元に根差したプリズムらしさ”を意識し始めた当時、市民の方が主体となって一緒に作った特別な作品です」。プリズムホールを運営して35年、市民や利用者の皆さんと歩んできた歴史こそが財産だ、と大久保館長。「八尾の人は陽気でパワフル。これからも地域の皆さんと一緒にまち全体で芸術文化が感じられる様、活動していきます」

八尾市文化会館 プリズムホール Webサイト

八尾市文化会館 プリズムホール YouTubeチャンネル

「創作オペラかわち歌しばい『美男におわす八尾地蔵』」の1シーン。「スタッフや出演者も、八尾の逸材が集まっています」

「あなたのアートを輝かせよう！！」では、地域アーティストや市民の企画実現の場を提供。（かこい絵里加「親子で楽しむコンサート」）

八尾市在住「ペーザンようこ」さんの
イラストが目を引きます

「手書き文化」筆手紙道協会®
浦川家元の演出も鮮やかに

八尾市観光案内所に「ふる さと横丁」コーナーが誕生！ものづくり八尾を「見て！」「触れて！」いただけます。

●一部商品は今後販売いたします。また展示商品は定期的に変わります

「ふるさと横丁」展示商品は、がんばれ八尾
応援寄附金の寄附サイトでお申し込みいただけます。

「ふるさとチョイス」Webサイト
「ふるなび」Webサイト
「楽天ふるさと納税」Webサイト
「auPAYふるさと納税」Webサイト

ヤオマニアが劇的にリニューアル

皆様の投稿をメインに編集、より身近な 冊子に生まれ変わります

創刊号は今秋～冬に発行予定

会社自慢、お店自慢、大歓迎！
どんどん宣伝、がっつり広報！
『ページヤオマニア』を
有効活用してください！

投稿は
こちらから

Page Yaomaniaとは

『Page Yaomania』の誌面スペースを埋めるのは、貴社・貴店からいただく情報です！会社やお店の広報宣伝・PR活動に、ぜひご活用ください！

投稿は
こちらから

創刊号のテーマは
「私のお気に入り」！
写真でも絵でも大歓迎！
採用された方には薄謝進呈。

Picture Yaomaniaとは

Instagramのイメージで八尾の魅力スポットや一度は食べて欲しいグルメなど、テーマに応じて皆様からいただいた情報を冊子にしてお届けします。

二つのヤオマニアは不定期発行♪　新鮮な情報をお手元に☆